

第6表 マツノシンマダラメイガの天敵寄生状況

月 天 敵 \	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
調査頭数	79	304	364	68	67	87	149	65	46	149	36	66
生虫数	69	189	264	31	53	80	133	59	40	133	35	61
生存率	87	62	72	46	80	92	89	91	87	89	97	92
Microgaster sp	2	45	19		1		12		1	11		2
マツノシンマダラヤドリバエ			4	2			1					
ヒメバチ科の1種					3							
コマユバチ科の1種	1		2	9	2	1			2			
硬化死	2	11	4						1			2
軟化死	2	14						2				
不明死	3	45	71	26	8	6	3	4	2	5	1	1

112. 松の芯くい虫（小蛾）の防除薬剤の効果試験

大分県林業試験場	飯 千 堀	田 原 田	達 賢	雄 次 隆
----------	-------------	-------------	--------	-------------

1. はじめに

近年、日田地方では、松類の人工造林地に致命的被害を与えるマツカレハの被害に加えて、松の芯くい虫による被害が大きくなってきた。このことは松の造林地ばかりでなく採種園の造成管理の上にも大きな問題となりつつあるので、昭和42年度より薬剤による予防試験を行い好結果を収めたので、その結果について報告する。

この試験は林業薬剤協会の委託試験によって実施したものであることを申添える。

2. 試験の方法

(1) 対象害虫

害虫の種類は①マツヅアカシンムシ②マツヅマアカシンムシ③マツノシンマダラメイガなどである。これらのうちで最も多いものは①で②③は極めて少なかった。

被害発生は5月下旬から6月にかけて最も多く7、8月の順に少くなっている。被害部位は新梢の頂芽に

最も多いが、松の成育につれて側枝の数が増加すると頂芽、側芽の別なく被害をうける。

成虫の発生時期については詳細な調査はしていないが大体次のようである。マツヅアカシンムシ=2月下旬～3月、マツヅマアカシンムシ=3月中旬～4月と7月および8月下旬から9月上旬の3回、マツノシンマダラメイガ=5～6月および8月の2回

(2) 薬剤散布の時期

薬剤の散布時期は産下された小幼虫が樹体表面を匍匐する時期から新梢へ穿孔し、まだ浅い時期を予防の適期と考え、羽化期を中心に散布時期を決定した。

本試験地ではマツヅアカシンムシが優占種でマツヅマアカシンムシ、マツノシンマダラメイガは極めて少ないものでマツヅアカシンムシを中心に5月上旬（S42年度は天候等の都合で中旬に散布した。）7月上旬、9月上旬の3回散布した。

(3) 供試薬剤とその散布濃度

第1表 供試薬剤と散布濃度

薬剤名	剤型	成 分	散布量	稀釀倍数
スミバーク乳剤	乳	スミチオン BHC EDB 6% 10% 5%	単木的に処理し処理木に薬液	50倍
KKK-201乳剤	乳	パラチオン DDT 25% 10%	が充分かゝる程度に散布した。	42年度 750倍 43年度 250倍

(4) 試験地の概況

試験地は日田市大字山田字小迫、アカマツ5~6年生の人工林で地形は南に面した10~25°の傾斜地で、林況は第2表のとおりである。

第2表 試験地の林況

試験地	樹種	林令	樹高	1本当り新梢数
42年度	アカマツ	5年	1.5m 1.4~1.8	483 421~535
43年度	"	6年	1.3 1.0~1.7	421 315~508

試験区はスミバーク乳剤およびKKK-201乳剤の2薬剤を用い各々1、2、3回散布と対照区の計7区、繰返し3回合計21処理区とし、昭和43年度はKKK-201乳剤の1薬剤を用い1、2、3回散布と対照区の計4区、繰返し3回合計12処理区で比較検討した。各処理区の調査本数は各々50本宛とした。

各処理区とも林地況および成育状態をほぼ等しくした場所に試験地を設定し、樹高、新梢数のほぼ等しいものを単木的に選んで調査木とした。

3. 試験結果および考察

被害調査は、単木的に被害新梢数全部について調査し、調査本数に対する被害本数と無処理区の被害新梢数を100とした指標とで被害率を算出した。その結果は第3表に示すとおりで、被害本数ではA区（スミバーク乳剤）が1、2、3回散布区とも極めて少なく無処理区95.3%に対し7.3~16%であった。B区（KKK-201乳剤）は供試木のほとんどが被害をうけ、85.3~92%の被害率で無処理区との間に差は認められなかった。

被害新梢数でもA区（スミバーク乳剤）の効果は著しく、被害率僅かに2.2~4.5%であった。また単木当たり被害数梢数にしても無処理区5.69本に対し、僅かに0.12~0.25本で顕著な効果がみられたが、B区（KKK-201乳剤）では54.5~70.2%の被害率で、単木当たりの被害新梢数も3.1~3.97本でA区（スミバーク乳剤）に比べて効果は極めて低かった。

B区（KKK-201乳剤）の効果が低かった原因として、薬剤の稀釀濃度に問題があると考えられたので、昭和43年度は濃度を高めて再度試験を行なった。前年度750倍液で散布したものと本年度は250倍の高濃度で散布した。その結果は被害本数で無処理区の98.7%に対し33.3~49.3%、被害新梢数では10~16.6%の被害率で、単木当たり被害新梢数も無処理区5.55本に対し0.55~0.56本と好成績が認められた。このことから濃度を高めることによって充分な効果が期待されるものと考えられる。

散布回数による効果については、バラツキが大きく効果は認められなかった。この原因は①供試木の新梢数に個体差があったため害虫の寄生数にも差があった②マツザカシンムシ、マツノシンマダラマイガの初回以降の発生が少なかった③薬剤の残効期間が長いことなどが考えられる。

4. 結び

スミバーク乳剤、KKK-201乳剤とも松の芯くい虫類の予防薬剤として著しい効果が認められたが、薬剤の散布回数、散布時期については発生虫の種類と密度ならびに羽化産卵の時期等地方差が大きいので各地方の優占種を中心として、その場所における害虫の発育経過について調査をすすめ、地方別散布の時期、散布回数を究明し、より高率的予防効果をあげたい。

第3表 松の芯くい虫にに対する薬剤効果

試験年度	処理名	理別	供試布	被害本数	被害指數	被害指數	被害指數	被害指數	摘要			
									1 Block	2 Block	3 Block	平均
昭和42年度	無処理区	0回	本50	本45	本50	47.7	95.3	198	305	350	284.3	100
	A区(スミバーグ乳剤)	1月5.15~16日	本50	本5	本2	5.3	10.7	12	18	2	10.7	3.8
		2月7.4~6日	本50	本18	本2	4	8.0	16.0	27	3	8	12.7
	50倍液	3月5.15~16日	本50	本4	本3	3.7	7.3	6	5	8	6.3	2.2
		7月7.4~6日	本50	本4	本3	3.7	7.3	6	5	8	6.3	2.2
		9月9.4日	本50	本4	本3	3.7	7.3	6	5	8	6.3	2.2
B区(KKK-201乳剤)	1月5.15~16日	本50	本47	本41	本50	46	92.0	179	167	253	199.7	70.2
	2月7.4~6日	本50	本46	本44	本44	44.7	89.3	192	133	140	155.0	54.5
	750倍液	3月5.15~16日	本50	本45	本40	43	42.7	85.3	200	125	175	166.7
		7月7.4~6日	本50	本45	本40	43	42.7	85.3	200	125	175	166.7
		9月9.4日	本50	本45	本40	43	42.7	85.3	200	125	175	166.7
昭和43年度	無処理区	0回	本50	本49	本49	49.3	98.7	342	253	237	277.3	100
	KKK-201乳剤区	1月5.1日	本50	本37	本29	8	24.7	49.3	88	41	9	46
		2月7.3日	本50	本23	本25	8	18.7	37.3	42	33	9	28
	250倍液	3月5.3日	本50	本11	本25	14	16.7	33.3	21	40	22	27.7
		7月7.5日	本50	本11	本25	14	16.7	33.3	21	40	22	27.7
		9月9.5日	本50	本11	本25	14	16.7	33.3	21	40	22	27.7

(注) 被害本数による指數: 供試本数 100 被害新指數による指數: 無処理100

調査

S 43.
10.11
調査

S 42.
11.22
調査

S 43.
10.11
調査

S 43.
10.11
調査